

事業の実施状況等について

【鶴見区】 (受託者等:大阪市コミュニティ協会)

1 地域活動協議会の現在の状況についての分析(年度当初・期末)(受託者が記入)

項目		
自律的運営に向けた地域活動協議会の取組(イメージ)	(1)「Ⅰ 地域課題への取組」についての分析	<ul style="list-style-type: none"> ・12地域それぞれに事務局体制など運営に関する課題や取り組み方は異なる。また、新規にビジネス的手法で事業を展開することに対する考え方も違う。事業化については、ニーズ調査や意思決定、体制や資金計画などに計画的に取り組んでいく必要がある。 ・新しい取組みについてもアイデア出しや合意形成などのための時間をとる必要がある。
	(2)「Ⅱ つながりの拡充」についての分析	<ul style="list-style-type: none"> ・地域活動協議会の立ち上げ準備段階で、地域の課題や事業の精査を検討していたが、立ち上げ後は、新しい枠組みで行事の企画・運営、あるいは新規メンバーが担当するテーマに関する地域の状況を把握するのに時間がかかり、課題に対応するための新しい取組みに着手できなかったところも多かった。 ・H25年度支援事業から継続して実施している「つるばた会議」を発展させ、鶴見区区政会議やNPO・区内企業などと連携して、鶴見区全体を見通しながら、まちと暮らしを考える場をつくり、地域の課題をみんなで考え、調べ、対応策を検討する場を提供する。
	(3)「Ⅲ 組織運営」についての分析	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマごとに設置している部会では、行事ごとに関連する地域団体や事業所、NPO法人などの参加を得て、協働する場として運営することを目標としている。H26～27年度において、2つの既存行事を共同開催する等、それをもとに新規事業にしたケースも出てきている。一方で、補助金制度の変更や、地域福祉や防災分野で「共助」を再考する取組みが進行しており、行事をするだけでなく、各部会において、改めて地域の課題を共有し、地域としてできることを協議する必要がある。 ・そのため、各部会で多様な人材の参加を得て、話し合う場づくりとその運営も支援する。

2 支援の内容及び効果等(1) 上段は受託者等が記入、下段は区が記入)

- (※) I・地域課題やニーズに対応した活動の実施 ・法人格の取得
- II・これまで地域活動に関わりの薄かった住民の参加の促進 ・地域活動協議会を構成する活動主体同士の連携・協働(担い手の拡大を含む)【地域活動協議会内部】
- ・地域活動協議会を構成する活動主体同士との連携・協働【外部との連携】 ・II 地域公共人材の活用」
- III・議決機関(総会・運営委員会等)の適正な運営 ・会計事務の適正な執行 ・多様な媒体による広報活動」

項目(※)	I	II	III	事業者選定時における企画提案(事業計画書)の概要	(上段)支援状況(実績) (下段)支援状況に対する区の意見	(上段)左記の支援効果 (下段)支援効果に対する区の意見	(上段)左記の状況及び効果を踏まえた課題分析と今後の改善策等 (下段)課題分析と今後の改善策等に対する区の意見
百律的運営に向けた地域活動協議会の取組(イメージ)	○			<ul style="list-style-type: none"> ・12地域それぞれに事務局体制など運営に関する課題や取り組み方は異なる。また、新規にビジネス的手法で事業を展開することに対する考え方も違う。事業化については、ニーズ調査や意思決定、体制や資金計画などに計画的に取り組んでいく必要がある。 ・新しい取組みについてもアイデア出しや合意形成などのための時間をとる必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年度始め(事業開始時期)に、区役所担当者およびまちづくりセンター全員で、「地域の現状と課題分析の共有」を行う時間をとり、各地域のターゲット設定とそれに向けた支援計画(行動目標)を設定し、それぞれに応じた支援を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> 発注者側担当者及び受託者側メンバー全員が地域における現状と課題について把握し、今年度の目標設定を行うことができたため、地域の状況に応じた緊密な支援を行うことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでまちセンとしては、地活協運営についての課題を設定し、その改善に向けた働きかけを行ってきた。現状のレベルをもう一段上げるためには、落ち込み部分への支援(マイナスをゼロベースにする)とともに、運営委員による自発的な取組みを支援(まちセンからの支援待ちではなく)することも必要である。 ・新規事業だけでなく、運営面での工夫についても部会や役員会、運営委員会で議論し、目標を設定してもらい、それを支援していく方向に進めて行く必要がある。
				<ul style="list-style-type: none"> ・年度始めに立てた支援計画に基づき、各地域の課題やニーズに応じて的確に支援された。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年度始めに各地域の現状と課題を発注者も交えて整理したことで、当区における支援の方針が明確化され、効果的・効率的な支援につながった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・受託者の分析どおり、今後、地活協がレベルアップをするにはさらなる底上げ支援と自発的な取組みへの支援が必要であると考えられる。 	
事業の実施状況及び効果		○		<p>昨年度から開始した分野別の事例勉強会である「ツララボ」を引き続き開催。2つの分野で各2回づつ開催し、それぞれの分野において、現在の担い手である参画者たちへの支援を行うとともに、新たな担い手にとって参加しやすい取り組みの紹介を行う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ツララボ10「福祉のまちづくり 前編(高齢者福祉)」(7月5日実施 参加者47名) ・ツララボ11「福祉のまちづくり 後編(子育て応援)」(8月30日実施 参加者38名) →これまでのワークショップで扱ってこなかった福祉分野について情報共有の機会として実施。区内の事例共有および区外の事例を共有。高齢者福祉については、高齢者福祉をとりまく環境及び事業を分類整理して示した。子育て応援については、行政や地縁団体の事例だけでなく、区内で活動する任意グループ(子育てママさんのサークル等)や店舗(カフェ等)で行っている子育て支援の取組みについて共有する機会を設けた。 ・ツララボ12「広報×自主財源 前編(地域ブログで稼ぐ)」(11月29日実施 参加者36名)→ローカルメディア発行者として大阪市内で最も収益を上げながら地域情報を発信している当事者を講師に招き、どのような記事が多くの方の興味を引くのかについて知ってもらう機会を設けた。 ・ツララボ13「広報×自主財源 後編(YouTubeで稼ぐ)」(令和2年1月30日実施 参加者41名)→収入を得ながら情報を発信するツールの事例としてYouTubeを取り上げ、実際に収益を得ている在阪YouTuber2名を講師に招き解説を受けるとともに、スマートフォンだけでできる編集と投稿の実演を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ツララボ10では、今までツララボやつるばた会議に参加していない地活協メンバー(ネットワーク、つなげ隊、民生委員など)や、昨年度実施調査で協力可能と回答のあった事業所や団体からの参加があった。事例共有も含めて、様々な立場の方同士の意見交換ができた。事業運営に活かそうな手ごたえを感じてもらえた。 ・ツララボ11では、子育て当事者が参加したことにより、地域で子育てサロンを長年運営してきた方が「当事者が求める子育て応援」について聞く機会を持っていないことに気づいてもらえた。子育てサロンの参加者が減っている原因にも触れたので、今後の運営方法を見直そうという地域もあった。 ・ツララボ12では、地活協の広報担当者が多数参加した。新聞づくりワークショップを実施したことで、新たな記事のヒントをつかみ、その後の地域新聞に反映しようという地域もあった。 ・ツララボ13では、地活協関係者以外の若い方の参加が目立った。編集の実演を見たことで「意外と簡単だ、やってみよう」というアンケート結果もあり、YouTubeのハードルが下がったと考えられる。 ・全体を通して、すべてのテーマで区内12地活協の事業分析を行い報告したことで、他の地域と比較を行うことができ、事業の改善等につながっていている。また、後半のグループトークでファシリテーターと板書を参加者に体験してもらうことが刺激となって、地域独自でワークショップを行う地域も出てきており、自律的な地域運営の取り組みに成果をあげたと言える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ツララボ10では、今までツララボやつるばた会議に参加していない地活協メンバー(ネットワーク、つなげ隊、民生委員など)や、昨年度実施調査で協力可能と回答のあった事業所や団体からの参加があった。事例共有も含めて、様々な立場の方同士の意見交換ができた。事業運営に活かそうな手ごたえを感じてもらえた。 ・ツララボ11では、子育て当事者が参加したことにより、地域で子育てサロンを長年運営してきた方が「当事者が求める子育て応援」について聞く機会を持っていないことに気づいてもらえた。子育てサロンの参加者が減っている原因にも触れたので、今後の運営方法を見直そうという地域もあった。 ・ツララボ12では、地活協の広報担当者が多数参加した。新聞づくりワークショップを実施したことで、新たな記事のヒントをつかみ、その後の地域新聞に反映しようという地域もあった。 ・ツララボ13では、地活協関係者以外の若い方の参加が目立った。編集の実演を見たことで「意外と簡単だ、やってみよう」というアンケート結果もあり、YouTubeのハードルが下がったと考えられる。 ・全体を通して、すべてのテーマで区内12地活協の事業分析を行い報告したことで、他の地域と比較を行うことができ、事業の改善等につながっていている。また、後半のグループトークでファシリテーターと板書を参加者に体験してもらうことが刺激となって、地域独自でワークショップを行う地域も出てきており、自律的な地域運営の取り組みに成果をあげたと言える。 	<p>それぞれの回で共有された事例を取り入れようと動く地域に対して、今後も引き続き情報提供などの支援を行う。</p>
				<ul style="list-style-type: none"> ・当初の計画に基づいて的確に支援されている。 ・地域課題に寄り添ったテーマで開催し、多くの参加者が見られたことが評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉のまちづくりのテーマでは、アンケートの結果、参加者の80%以上の方がツララボで得た情報を地域の取組みに活かしたいと答えており、有効であった。 ・広報×財源のテーマでは、参加者の約半数が地活協のスタッフ以外の方で、年齢も50代以下の若い年代の方が多数参加されていた。 ・全体を通して多くの参加者が見られ、地域間の情報共有の場となった。 ・イベントの実施を広く周知したことで、地域活動協議会の認知度向上につながった。また、地活協の構成員以外の参加者も多く見られた。平成30年度のツララボ参加者が地活協の活動に新たに参加を始めたことから、新たな担い手の発掘にも有効であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ツララボ開催をきっかけに事業の見直しに動き出している地域は、積極的に支援されたい。 ・ツララボ等イベントへの参加が積極的な地域とそうでない地域に差があるので、積極的でない地域に対するアプローチも検討されたい。 ・また、引き続き地活協のスタッフ以外の参加者を、新たな活動の担い手として地域につなげるよう積極的に支援されたい。 	

事業の実施状況及び効果 百律的運営に向けた地域活動協議会の取組 (イメージ)	I	II	III	事業者選定時における企画提案(事業計画書)の概要	(上段)支援状況(実績) (下段)支援状況に対する区の意見	(上段)左記の支援効果 (下段)支援効果に対する区の意見	(上段)左記の状況及び効果を踏まえた課題分析と今後の改善策等 (下段)課題分析と今後の改善策等に対する区の意見
			○	<ul style="list-style-type: none"> テーマごとに設置している部会では、行事ごとに関連する地域団体や事業所、NPO法人などの参加を得て、協働する場として運営することを目標としている。H26～27年度において、2つの既存行事を共同開催する等、それをもとに新規事業にしたケースも出てきている。一方で、補助金制度の変更や、地域福祉や防災分野で「共助」を再考する取組みが進行しており、行事をするだけでなく、各部会において、改めて地域の課題を共有し、地域としてできることを協議する必要がある。 そのため、各部会で多様な人材の参加を得て、話し合う場づくりとその運営も支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> 部会での話し合いについては、部会活動が定着している地域については順調に自律的に取組まれた。 部会が定着していない地域について開催を促してきた。 行事实施のための集まりは実施されているが、課題共有の場としての運営ができていない場合には、問題提起をするよう心がけた。 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な課題を指摘し続けることで、運営委員全体で改善に向けた動きをつくることができた地域もあった。 	<p>今後、実施する事業計画・予算づくりの段階で、活発な意見交換を促して行きたい。</p>
				<ul style="list-style-type: none"> 積極的な部会支援により、自律的に運営される部会が増えている。 部会の開催が不定期的な地域については積極的に開催を促していると評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な内容を徹底的に支援することで、議決の在り方などが改善された地域が現れており、有効な支援であると評価できる。 組織運営にかかる底上げ支援を行ったことで、部会の定着も進んできた。 	<ul style="list-style-type: none"> 部会の開催が定着していない地域については引き続き開催を促す必要がある。 行事实施の話し合いは活発であるが、課題の共有、解決への話し合いに至らない場合が多いので、事業実施後に部会や役員会で振り返る機会を設け、次年度の計画や自業務直しを促していく必要がある。 	

3 支援内容及び効果等(2)(上段は受託者が記入、下段は区が記入)

支援	事業者選定時における企画提案(事業計画書)の概要	(上段)支援状況(実績) (下段)支援状況に対する区の意見	(上段)左記の支援効果 (下段)支援効果に対する区の意見	(上段)左記の状況及び効果を踏まえた課題分析と今後の改善策等 (下段)課題分析と今後の改善策等に対する区の意見
<p>(1)自由提案による地域支援の実施状況</p> <p>(企画提案書(事業計画書)等で受託者が提案したもの)</p> <p>事業の実施体制等</p>	<p>つながりの拡充→<テーマ別勉強会>これまで実施してきた「つるバタ(鶴見区大井戸端会議)」では、広い多様なテーマで話し合い、学びを深める機会として実施してきたが、今年度より、決まったテーマに特化した研究会として「ツルラボ(鶴見区地域活動研究会)」を継続。</p>	<p>・ツルラボ10「福祉のまちづくり 前編(高齢者福祉)」(7月5日実施 参加者47名)</p> <p>・ツルラボ11「福祉のまちづくり 後編(子育て応援)」(8月30日実施 参加者38名)</p> <p>→これまでのワークショップで扱ってこなかった福祉分野について情報共有の機会として実施。区内の事例共有および区外の事例を共有。高齢者福祉については、高齢者福祉をとりまく環境及び事業を分類整理して示した。子育て応援については、行政や地縁団体の事例だけでなく、区内で活動する任意グループ(子育てママさんのサークル等)や店舗(カフェ等)で行っている子育て支援の取組みについて共有する機会を設けた。</p> <p>・ツルラボ12「広報×自主財源 前編(地域ブログで稼ぐ)」(11月29日実施 参加者36名)→ローカルメディア発行者として大阪市内で最も収益を上げながら地域情報を発信している当事者を講師に招き、どのような記事が多くの方の興味を引くのかについて知ってもらう機会を設けた。</p> <p>・ツルラボ13「広報×自主財源 後編(YouTubeで稼ぐ)」(令和2年1月30日実施 参加者41名)→収入を得ながら情報を発信するツールの事例としてYouTubeを取り上げ、実際に収益を得ている在阪YouTuber2名を講師に招き解説を受けるとともに、スマートフォンだけでできる編集と投稿の実演を行った。(再掲)</p> <p>・当初の計画に基づいて的確に支援されている。 ・地域課題に寄り添ったテーマで開催し、多くの参加者が見られたことが評価できる。(再掲)</p>	<p>・ツルラボ10では、今までツルラボやつるばた会議に参加していない地活協メンバー(ネットワーク、つなげ隊、民生委員など)や、昨年度実施調査で協力可能と回答のあった事業所や団体からの参加があった。事例共有も含めて、様々な立場の方同士の意見交換ができた。事業運営に活かそうな手ごたえを感じてもらえた。</p> <p>・ツルラボ11では、子育て当事者が参加したことにより、地域で子育てサロンを長年運営してきた方が「当事者が求める子育て応援」について聞く機会を持っていないことに気づいてもらえた。子育てサロンの参加者が減っている原因にも触れたので、今後の運営方法を見直そうという地域もあった。</p> <p>・ツルラボ12では、地活協の広報担当者が多数参加した。新聞づくりワークショップを実施したことで、新たな記事のヒントをつかみ、その後の地域新聞に反映しようという地域もあった。</p> <p>・ツルラボ13では、地活協関係者以外の若い方の参加が目立った。編集の実演を見たことで「意外と簡単だ、やってみよう」というアンケート結果もあり、YouTubeのハードルが下がったと考えられる。</p> <p>・全体を通して、すべてのテーマで区内12地活協の事業分析を行い報告したことで、他の地域と比較を行うことができ、事業の改善等につながっていている。また、後半のグループトークでファシリテーターと板書を参加者に体験してもらうことが刺激となって、地域独自でワークショップを行う地域も出てきており、自律的な地域運営の取組みに成果をあげたと言える。(再掲)</p> <p>・福祉のまちづくりのテーマでは、アンケートの結果、参加者の80%以上の方がツルラボで得た情報を地域の取組みに活かしたいと答えており、有効であった。</p> <p>・広報×財源のテーマでは、参加者の約半数が地活協のスタッフ以外の方で、年齢も50代以下の若い年代の方が多数参加されていた。</p> <p>・全体を通して多くの参加者が見られ、地域間の情報共有の場となった。</p> <p>・イベントの実施を広く周知したことで、地域活動協議会の認知度向上につながった。また、地活協の構成員以外の参加者も多く見られた。平成30年度のツルラボ参加者が地活協の活動に新たに参加を始めたことから、新たな担い手の発掘にも有効であった。(再掲)</p>	<p>それぞれの回で共有された事例を取り入れようと動く地域に対して、今後も引き続き情報提供などの支援を行う。</p> <p>・ツルラボ開催をきっかけに事業の見直しに動き出している地域は、積極的に支援されたい。</p> <p>・ツルラボ等イベントへの参加が積極的な地域とそうでない地域に差があるので、積極的でない地域に対するアプローチも検討されたい。</p> <p>・また、引き続き地活協のスタッフ以外の参加者を、新たな活動の担い手として地域につなげるよう積極的に支援されたい。(再掲)</p>
	<p>業務責任者 必要に応じて勤務(週1日程度)</p> <p>アドバイザー 原則 週4日勤務</p> <p>アドバイザー補(兼支援員A) 原則 週4日勤務</p> <p>支援員B 原則週4日勤務</p> <p>地域・地活協のニーズに沿った支援を各職員のスキルを最大限活かして実施していくために、支援内容によっては、各職員が担当地域外の支援も実施する。ビジョンや事業の見直しなどでワークショップを開催するなど、多人数での話し合いの場を支援する際には、全身体制をとる。</p>	<p>提案のとおり、各人員を配置して業務を行っている。</p> <p>また「ツルラボ」などのフォーラム実施時は、弊社で受託している他まちづくりセンターからの応援を呼ぶなどの臨時体制も構築している。</p> <p>・職員のスキルを生かした支援を行うため、テーマによって担当地域外の支援も実施した。ワークショップを実施する場合は、全体で応援体制をとった。</p> <p>・職員のスキルを生かし、地域担当制を基本としながらも柔軟に支援を行われた。</p>	<p>・スタッフが得意とするスキルを活かしてフレキシブルに地域支援が実施できた。</p> <p>・地域課題に応じて柔軟に支援を行われた結果、地域の課題やニーズにマッチした有効な支援が提供できたと評価できる。</p>	<p>引き続き、現体制で業務を行う</p> <p>・引き続き工夫を講じた体制で支援を行われたい。</p>

支援	事業者選定時における企画提案(事業計画書)の概要	(上段)支援状況(実績) (下段)支援状況に対する区の意見	(上段)左記の支援効果 (下段)支援効果に対する区の意見	(上段)左記の状況及び効果を踏まえた課題分析と今後の改善策等 (下段)課題分析と今後の改善策等に対する区の意見
(2-2)フォロー(バックアップ)体制等	弊社はまちづくり支援事業において多くの実績を有する会社であり、すでに配置済みの人員と同等以上の知識と経験を有する人員をストックさせている。そのため欠員や繁忙期(フォーラム開催等)におけるフォロー体制を万全に整えている。	<ul style="list-style-type: none"> ・職員のスキルを生かした支援を行うため、テーマによって担当地域外の支援も実施した。ワークショップを実施する場合は、全体で応援体制をとった。 ・本部への連絡は月1回開催されるアドバイザー会議に出席し、定期的に行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的に他地域の取組み情報を得ることができた。 ・他地域のWSに研修をかねて応援することで、支援員のスキルアップと視野の拡大につながった。 	引き続き、現体制で業務を行う
		<ul style="list-style-type: none"> ・他区・本部との連携を密に取られており、当区の支援に反映させるなど高く評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に他区のワークショップ、研修等に参加され、支援員のスキルアップに尽力されていると評価できる。 	引き続き工夫を講じた体制で支援を行われたい。
事業の実施体制等 (3)区のマネジメントに対応した取組	つながりの拡充→<テーマ別勉強会>これまで実施してきた「つるバタ(鶴見区大井戸端会議)」では、広い多様なテーマで話し合い、学びを深める機会として実施してきたが、今年度より、決まったテーマに特化した研究会として「ツルラボ(鶴見区地域活動研究会)」を継続。	<ul style="list-style-type: none"> ・ツルラボ10「福祉のまちづくり 前編(高齢者福祉)」(7月5日実施 参加者47名) ・ツルラボ11「福祉のまちづくり 後編(子育て応援)」(8月30日実施 参加者38名) →これまでのワークショップで扱ってこなかった福祉分野について情報共有の機会として実施。区内の事例共有および区外の事例を共有。高齢者福祉については、高齢者福祉をとりまく環境及び事業を分類整理して示した。子育て応援については、行政や地縁団体の事例だけでなく、区内で活動する任意グループ(子育てママさんのサークル等)や店舗(カフェ等)で行っている子育て支援の取組みについて共有する機会を設けた。 ・ツルラボ12「広報×自主財源 前編(地域ブログで稼ぐ)」(11月29日実施 参加者36名)→ローカルメディア発行者として大阪市内で最も収益を上げながら地域情報を発信している当事者を講師に招き、どのような記事が多くの方の興味を引くのかについて知ってもらう機会を設けた。 ・ツルラボ13「広報×自主財源 後編(YouTubeで稼ぐ)」(令和2年1月30日実施 参加者41名)→収入を得ながら情報を発信するツールの事例としてYouTubeを取り上げ、実際に収益を得ている在阪YouTuber2名を講師に招き解説を受けるとともに、スマートフォンだけでできる編集と投稿の実演を行った。(再掲) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ツルラボ10では、今までツルラボやつるばた会議に参加していない地活協メンバー(ネットワーク、つなげ隊、民生委員など)や、昨年度実施調査で協力可能と回答のあった事業所や団体からの参加があった。事例共有も含めて、様々な立場の方同士の意見交換ができ、事業運営に活かせるような手ごたえを感じてもらえた。 ・ツルラボ11では、子育て当事者が参加したことにより、地域で子育てサロンを長年運営してきた方が「当事者が求める子育て応援」について聞く機会を持っていないことに気づいてもらえた。子育てサロンの参加者が減っている原因にも触れたので、今後の運営方法を見直そうという地域もあった。 ・ツルラボ12では、地活協の広報担当者が多数参加した。新聞づくりワークショップを実施したことで、新たな記事のヒントをつかみ、その後の地域新聞に反映しようという地域もあった。 ・ツルラボ13では、地活協関係者以外の若い方の参加が目立った。編集の実演を見たことで「意外と簡単だ、やってみよう」というアンケート結果もあり、YouTubeのハードルが下がったと考えられる。 ・全体を通して、すべてのテーマで区内12地活協の事業分析を行い報告したことで、他の地域と比較を行うことができ、事業の改善等につながっていている。また、後半のグループトークでファシリテーターと板書を参加者に体験してもらうことが刺激となって、地域独自でワークショップを行う地域も出てきており、自律的な地域運営の取り組みに成果をあげたと言える。(再掲) 	それぞれの回で共有された事例を取り入れようと動く地域に対して、今後も引き続き情報提供などの支援を行う
		<ul style="list-style-type: none"> ・当初の計画に基づいて的確に支援されている。 ・地域課題に寄り添ったテーマで開催し、多くの参加者が見られたことが評価できる。(再掲) 	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉のまちづくりのテーマでは、アンケートの結果、参加者の80%以上の方がツルラボで得た情報を地域の取組みに活かしたいと答えており、有効であった。 ・広報×財源のテーマでは、参加者の約半数が地活協のスタッフ以外の方で、年齢も50代以下の若い年代の方が多数参加されていた。 ・全体を通して多くの参加者が見られ、地域間の情報共有の場となった。 ・イベントの実施を広く周知したことで、地域活動協議会の認知度向上につながった。また、地活協の構成員以外の参加者も多く見られた。平成30年度のツルラボ参加者が地活協の活動に新たに参加を始めたことから、新たな担い手の発掘にも有効であった。(再掲) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ツルラボ開催をきっかけに事業の見直しに動き出している地域は、積極的に支援されたい。 ・ツルラボ等イベントへの参加が積極的な地域とそうでない地域に差があるので、積極的でない地域に対するアプローチも検討されたい。 ・また、引き続き地活協のスタッフ以外の参加者を、新たな活動の担い手として地域につなげるよう積極的に支援されたい。(再掲)

4 区の方針・戦略を踏まえた今年度の重点支援策(取組)の状況及び効果等(上段は受託者が記入、下段は区が記入)

支援策(取組)名称	事業者選定時における企画提案(事業計画書)の概要	(上段)支援状況(実績) (下段)支援状況に対する区の意見	(上段)左記の支援効果 (下段)支援効果に対する区の意見	(上段)左記の状況及び効果を踏まえた課題分析と今後の改善策等 (下段)課題分析と今後の改善策等に対する区の意見
ツルラボ～地域活動研究会	<p>つながりの拡充→<テーマ別勉強会>これまで実施してきた「つるバタ(鶴見区大井戸端会議)」では、広い多様なテーマで話し合い、学びを深める機会として実施してきたが、今年度より、決まったテーマに特化した研究会として「ツルラボ(鶴見区地域活動研究会)」を継続。</p>	<p>・ツルラボ10「福祉のまちづくり 前編(高齢者福祉)」(7月5日実施 参加者47名) ・ツルラボ11「福祉のまちづくり 後編(子育て応援)」(8月30日実施 参加者38名) →これまでのワークショップで扱ってこなかった福祉分野について情報共有の機会として実施。区内の事例共有および区外の事例を共有。高齢者福祉については、高齢者福祉をとりまく環境及び事業を分類整理して示した。子育て応援については、行政や地縁団体の事例だけでなく、区内で活動する任意グループ(子育てママさんのサークル等)や店舗(カフェ等)で行っている子育て支援の取組みについて共有する機会を設けた。</p> <p>・ツルラボ12「広報×自主財源 前編(地域ブログで稼ぐ)」(11月29日実施 参加者36名)→ローカルメディア発行者として大阪市内で最も収益を上げながら地域情報を発信している当事者を講師に招き、どのような記事が多くの方の興味を引くのかについて知ってもらう機会を設けた。</p> <p>・ツルラボ13「広報×自主財源 後編(YouTubeで稼ぐ)」(令和2年1月30日実施 参加者41名)→収入を得ながら情報を発信するツールの事例としてYouTubeを取り上げ、実際に収益を得ている在阪YouTuber2名を講師に招き解説を受けるとともに、スマートフォンだけでできる編集と投稿の実演を行った。(再掲)</p> <p>・当初の計画に基づいて的確に支援されている。 ・地域課題に寄り添ったテーマで開催し、多くの参加者が見られたことが評価できる。(再掲)</p>	<p>・ツルラボ10では、今までツルラボやつるばた会議に参加していない地活協メンバー(ネットワーク、つなげ隊、民生委員など)や、昨年度実施調査で協力可能と回答のあった事業所や団体からの参加があった。事例共有も含めて、様々な立場の方同士の意見交換ができ、事業運営に活かそうな手ごたえを感じてもらえた。</p> <p>・ツルラボ11では、子育て当事者が参加したことにより、地域で子育てサロンを長年運営してきた方が「当事者が求める子育て応援」について聞く機会を持っていないことに気づいてもらえた。子育てサロンの参加者が減っている原因にも触れたので、今後の運営方法を見直そうという地域もあった。</p> <p>・ツルラボ12では、地活協の広報担当者が多数参加した。新聞づくりワークショップを実施したことで、新たな記事のヒントをつかみ、その後の地域新聞に反映しようという地域もあった。</p> <p>・ツルラボ13では、地活協関係者以外の若い方の参加が目立った。編集の実演を見たことで「意外と簡単だ、やってみよう」というアンケート結果もあり、YouTubeのハードルが下がったと考えられる。</p> <p>・全体を通して、すべてのテーマで区内12地活協の事業分析を行い報告したことで、他の地域と比較を行うことができ、事業の改善等につながっていている。また、後半のグループトークでファシリテーターと板書を参加者に体験してもらうことが刺激となって、地域独自でワークショップを行う地域も出てきており、自律的な地域運営の取組みに成果をあげたと言える。(再掲)</p> <p>・福祉のまちづくりのテーマでは、アンケートの結果、参加者の80%以上の方がツルラボで得た情報を地域の取組みに活かしたいと答えており、有効であった。 ・広報×財源のテーマでは、参加者の約半数が地活協のスタッフ以外の方で、年齢も50代以下の若い年代の方が多数参加されていた。 ・全体を通して多くの参加者が見られ、地域間の情報共有の場となった。 ・イベントの実施を広く周知したことで、地域活動協議会の認知度向上につながった。また、地活協の構成員以外の参加者も多く見られた。平成30年度のツルラボ参加者が地活協の活動に新たに参加を始めたことから、新たな担い手の発掘にも有効であった。(再掲)</p>	<p>それぞれの回で共有された事例を取り入れようと動く地域に対して、今後も引き続き情報提供などの支援を行う</p> <p>・ツルラボ開催をきっかけに事業の見直しに動き出している地域は、積極的に支援されたい。 ・ツルラボ等イベントへの参加が積極的な地域とそうでない地域に差があるので、積極的でない地域に対するアプローチも検討されたい。 ・また、引き続き地活協のスタッフ以外の参加者を、新たな活動の担い手として地域につなげるよう積極的に支援されたい。(再掲)</p>